

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 ジャカ スラクサナ

Jaka Sulaksana

インドネシア政府は農村開発のために農民団体の組織化を重要な政策課題としている。しかし、それらの組合の多くは短命であり、政策効果を十分に発揮するに行っていない。本論文では、1989年に設立されて、羊の繁殖事業を中心とする活動を今日まで継続してきた、西ジャワ州では例外的に長命な農民団体 Mekar Jaya Group (MJG) を分析対象にして取り上げた。そして、MJG の組織としての進化の過程を、設立期以来現在に至るまでの約 20 年間というタイムスパンを対象として分析を行った。そのために、リーダーの交代を指標として 4 つの時期に時期区分をし、それぞれの時期の組合活動、会員の団体に対する認知状況および会員相互の人間関係について 2002 年以降 3 次にわたって聞き取り調査を行った。本論文の論点は、下記の 3 点である。

第 1 に、グループの活動水準およびグループの能力に影響を与える会員の心理状況の変化のプロセスを分析することのできる指標として、40 項目の聞き取り調査にもとづいて、MJG のグループ・ダイナミクス指標を計測した。計測の結果、グループ・ダイナミクス指標は、第 1 期において他のいずれの時期よりも高い数値を示していることがわかった。第 3 期においてもっとも低位の数値を示し、第 4 期に回復している。サブ・リーダー間の紛争、あるいはフリーライダーの存在の発生とそれをめぐるグループ内での紛争が、第 3 期における指標の低下の要因であり、それらの問題の解消によって、第 4 期にはグループ・ダイナミクスの数値が回復した。また、グループ・ダイナミクスを構成する 4 つの要素の中で、会員相互の役割・規範の共有状況やネットワークの安定水準を示すグループ・ストラクチャー指標が、全期間を通じてグループ・ダイナミクスの水準を規定するもっとも重要な要素であった。そして、会員相互の安定的な関係が、グループ・ストラクチャーを安定化させる最大の要因であり、第 3 期の危機から MJG が脱出することができた要因でもあった。

第 2 に、グループを会員個々人（ノード）の間のネットワークとして想定したうえで、会員相互のコミュニケーション・ネットワークのパターンを分析した。その際、とくに、コミュニケーション・ネットワーク内でのブリッジおよびブリッジを有するノードによって構成されるカットポイントの存在に注目した。グループ・ダイナミクスが低下した第 3 期の危機を乗り越えて MJG が組織として存続しえた要因として、設立時以来のメンバーがカットポイントの中核として有効に機能した点が指摘できる。ネットワークのセントラリティに注目すると、その数値は、会員数の増減と密接にかかわっている。すなわち、第 1 期から第 3 期にかけて会員の増加とともにその数値は減少し、第 4 期に会員数が減少

したのを機に上昇している。

第3に、MJG 会員のモチベーションに影響を及ぼす要因について分析を行った。会員のモチベーションは、第1期から第3期にかけて継続的に減少したのに対して、第4期に増加に転じていることが計測できた。会員としてのモチベーションに対して、3つの要因が影響を与えていた。すなわち、内部要因、外部要因およびリーダーの役割である。そのなかでも、内部要因が、会員のモチベーションに最も強い影響力を持っていた。具体的には、羊飼育を長年行ってきたことによって蓄積された経験および外部からの援助によって実施されたインフォーマル教育によって強化された羊飼育のためのノウハウの獲得が内部要因として重要であった。豊かな経験と知識を兼ね備えた設立期以来の会員が共有している強いモチベーションが、MJG の活動をけん引するちからの基礎となっていることがわかった。第2の論点において確認された事実と併せて考えれば、設立時以来の会員の役割が、MJG の長命を支える基盤となっていたということが出来る。

以上、本論文では、西ジャワ州におけるひとつの農民団体を取り上げて、会員からの聞き取り調査をもとにして、その20年以上にわたる継続的な活動を可能とした組織としての進化の過程を分析した。この分析成果は、学術上、応用上資するところが少なくない。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。